

1936 年の郁達夫訪日について

寇 振 鋒

田村（大田）加代子・訳

1 はじめに

郁達夫は 1936 年 11 月 12 日から 12 月 19 日までの期間、日本を訪問した。しかし、利用できる資料に制約があるためか、この訪日についての先行研究はほとんどない。この訪日に関しては、例えば『讀賣新聞』、『都新聞』、『時事新報』、『中國文學月報』など、当時の日本の比較的影響力のあるメディアが訪日中の郁達夫について少なくとも十八回にも及ぶ報道をしており、このことから日本の民間における郁達夫訪日に対する関心の深さを知ることが出来る。日本の研究者がこの訪日行程についての考証を行ってはいるが¹、訪日の背後にある様々な事情やそれらがどのように関わり合っているかという問題については、現在に至るまで未だ的確な考証が行われていないのが現状である。

最近、筆者は、日本外務省外交資料館が新たに公開した、郁達夫 1936 年訪日に関する各種文書を発見した。これらの文書は全てマイクロフィルムの形式で保存されており、関係する文書は百余コマの多きにわたり、枚数にして二百頁もの分量があり、その中には当時の機密文書も相当数含まれている。これらの文書が、郁達夫研究にとって最も有力で最も詳細かつ確実な第一級資料であることは疑いががない。筆者は本論文で、現在入手したこれらの第一級の一次資料を通して、郁達夫訪日時これまで知られてこなかった一連の問題について事実関係を整理し、一歩踏み込んだ検証を行おうと思う。一連の問題とは、例えば、何が訪日の契機となったのか、日本側が郁達夫を招いた真の理由とは何か、郁達夫に同行したのは誰か、訪日の経費はどこから出

たのか、警視總監が把握していた訪日行程はどの程度であったのか、日本での講演はどのようなものであったか、等々。これらの問題を検討していくと、郁達夫は日本側に招かれてその身は日本にありながら、祖国のために正義を訴え続け、日本軍国主義の侵略意図を暴き続けたと同時に、祖国の売国奴を激しく非難し、愛国主義作家として心に懷いている強い正義感を表現しようとしたことが窺い知れる。本稿の考証を通して、郁達夫研究、ひいては現代日中関係史研究に、新しい端緒をつけることができればと考える。

2 訪日の契機

郁達夫訪日のそもそもの発端について最も一般的な見解は、「1936 年の冬に、南京政府侍従室の何廉が蒋介石の命を受けて福州の陳主席に電報を打った。その電文のおおよその内容は、郁達夫を日本に行かせて、東京に行って郭沫若と話をさせ、郭沫若を帰国させる、云々……。」² というものである。この証言によれば、郁達夫の訪日は南京国民党政府の派遣によるものだ、と推測して差し支えなさそうに見える。

しかし、事実は全く異なっている。郁達夫が日本を訪れたのは、もともと日本側の方から持ちかけたことに端を発するのだ。当時、福建省政府の主席であった陳儀が、時を同じくして福建省政府の参議に任ぜられていた郁達夫を台湾に視察に派遣しようとしていたところ、日本の駐福州総領事館の総領事であった中村豊一がこのことを知り、郁達夫に台湾視察の機会に日本も訪れるよう希望したのだ。中村が 1936 年 4 月 20 日に日本外務大臣有田八郎に手ずから書いた「機密第一五八號」を見れば、その経緯がわかる。〔訳注：以下の引用の原文は手書き。〕

當省主席陳儀ハ着任以來省政府各廳ニ極力日本留学生出身者ヲ採用シ將來モ引續キ採用スル意向ヲ有シ居ル趣ナルガ當方面ニ於ケル歐米派ノ殊

ニ青年ニ對スル勢力ハ尚牢固トシテ抜クヘカラザルモノアリ。歐米諸國カ多數ノ教育機關ヲ當地方ニ有シ居ル現状ニ鑑ミ右ノ已ムヲ得サル現象トハ被存モ陳儀ハ此ノ方面ニモ亦多大ノ關心ヲ示シ現ニ同郷支那著名ノ文學者郁達夫ヲ當省參議ニ聘シ文學方面ヨリ青年ノ日本ニ對スル認識ヲ深メント試ミ又近ク同人ヲシテ台灣方面ヲ視察セシメ度意向ヲ有シ居ルモ經費ノ都合上未タ實現ニ至ラサル模様ナリ。

同人ノ經歷ハ現代支那人名鑑所載ノ通り日本東京帝大出身者ニシテ最近ハ浙江大學教授ノ傍ラ「論語」ヲ主幹シ又現在ハ「宇風」（正しくは「宇宙風」一筆者注）ヲ毎号寄稿シツツアリ支那青年ノ間ニ相當多數ノ崇拜者ヲ有シ居ルコト御存知ノ通りナリ。就テハ此際同人ヲシテ台灣、更ニ日本ヲ視察セシムルコトハ日支親善上適切且ツ有効ナルベク被存ニ付キ……〔訳注：以下略〕³

〔訳注：以下、原文が日本語の各種文書の引用部分を転記する場合は、その仮名遣い（例えば濁点のあるなし、句読点のあるなし等）及び漢字の字体（正字体か略字体か等）は原文のママとする。〕

有田は「機密第一五八號」を受け取った二週間後には中村に返信し、郁達夫を日本に招聘することに同意する旨を表明している⁴。同時に、外務省がこの件に着手し、段取りを取り仕切り、月末には既に郁達夫訪日のために経費を試算している⁵。しかし、中村が有田からの返信を受け取った丁度その時、折悪しく郁達夫は一時的に杭州に帰っており、訪日の件は彼が福州に戻るのを待ってそれから確定する次第となった。一ヵ月半後に中村が有田に出した「機密第二六四號」に依れば、その時点で訪日の件は既に基本的に検討済みで結論が出されていたことがわかる。

本官陳主席ニ面談ノ機會ニ陳主席ガ郁達夫ヲ當地ニ呼寄セラレタル趣旨ニ賛成シ（四月二十日附閣下宛機密第一五八號參照）本官思付迄ニ文化事業部ノ補助ヲ仰キ郁達夫ヲ日本臺灣ノ視察ニ派遣セラレテハ如何ト素直ニ申出テタル處陳儀ニハ大イニ賛成シ本官ノ好意ヲ感謝スル旨述ヘタリ次テ郁達夫モ數日前歸福セルヲ以テ陳主席ノ意向ヲ傳ヘ其意見ヲ確メ

タル處此亦大イニ悦ヒ文化事業部ノ厚意ヲ深謝シ是非今年秋氣候ノ善キ頃ヲ見計ヒ渡日致シ度シト答ヘタリ⁶

「機密第二六四號」からは、中村の最初の考えは閩報館の特派員という肩書きで郁達夫を日本に招聘しようとしたが、閩報館の記者である郭藎民が中華民族革命同盟に加入し福建省政府の転覆活動に参加した嫌疑をかけられ当地の公安局に検挙された事件が発生し、郁達夫を特派員として派遣する形式には差し障りが生じたということもわかる。そのため、中村の最初の計画は放棄することを余儀なくされたのだった。

ここで再び、時間的な前後関係からも郁達夫の訪日は日本側が招聘したものであったことが推測できることに触れておきたい。郁達夫の訪日が国民政府による派遣だったという見解では、派遣の時期は1936年の冬だったという説もあり⁷、また、夏から秋にかけてだったという説もある⁸。しかし、実際には、上述したように、1936年4月には既に日本側から郁達夫の訪日の可能性について非公式な打診があった。郁達夫は同年5月末に福州に戻っている⁹。よって、遅くとも同年5月末から、中村が「機密第二六四號」を出した6月24日の間には、郁達夫は既に日本からの招聘を受けていることになる。日本側の招聘が先で、国民党がその意を受けたのが後だということは、明らかだ。

以上に述べたことをまとめると、郁達夫の訪日はまず日本側から提案され、その提案に陳儀と郁達夫が同意した後、初めて段取りをし始めたものであって、しかも、招聘したのは日本外務省文化事業部であり、仮に南京政府が郁達夫に何らかの使命を与えていたとしても、訪日の一件は決して南京政府の方から先に提案したものではない、と結論することができる。

3 日本側が郁達夫を日本に招聘した理由

郁達夫が日本を訪れる前にも日本側は既に多くの人を招聘していたのにも関わらず、なぜ日本は郁達夫を招聘することを主体的に働きかけたのだろう

か。筆者は、新たに発見した各種資料を基に総合的に考証した結果、以下に述べるいくつかの理由にたどり着いた。

まず第一に、郁達夫を日本に招聘したのは、実は当時の日本政府の対中国政策、所謂「対支文化事業」という文化外交政策の一環だった。

所謂「対支文化事業」とは一体何を指すのだろうか。これは、遡ると1901年9月7日に清朝政府が北京で調印した国辱的な「北京議定書」〔訳注：日本の外交文書における正式名称は「北清事変に関する最終議定書」、中国では「辛丑条約」若しくは「辛丑和約」と呼称。義和団の乱における列国と清国・義和団との戦後処理に関する最終議定書〕で規定されている、八ヶ国連合軍に対する賠償問題と関係している。この賠償金は日本では「団匪賠償金」と呼ばれ〔訳注：中国では「庚子賠款」と呼称〕の使途について、日本政府は1923年の『對支文化事業ニ關スル閣議案』で「一、團匪賠償金収入ヲ以テ一ノ特別會計ヲ設置シ日支親善の目的ヲ以テ主トシテ支那人ノ爲ニスル文化事業基金ニ充テ」¹⁰ するよう閣議決定を要請している。同年に施行された『對支文化事業實施綱領追加』という文書では、もと十項目あった対華文化事業の實施綱領〔訳注：「對支文化事業實施綱領」〕を基にして更に二項目追加されている。一つは、「日支間二名士ヲ交換シテ講演ヲナサシメ」ること、もう一つは、「個人又ハ團體ニテ我教育其他文化施設ヲ視察ニ來ルモノニ對シ相當名義ノ下ニ手當ヲ給シ視察ニ便宜ヲ與フルコト」¹¹ とある。その他にも、同年更に『對支文化事業特別會計法』が制定され、法律という形で中国からの団匪賠償金を対華文化事業に用いることを規定した。日本外務省は1936年に批准した機密文書『對支文化事業講演視察費ニ關スル件』で、明確に述べている。

支那ニ於ケル過去數年ニ渉ル反日的態度ハ最近著シク緩和シ來リ殊ニ南京政府親日政策ノ表明ト共ニ日支ノ關係ハ漸次好轉シツツアルハ事實ナリ仍テ我文化事業部ニ於テハ本來ノ目的ニ從フノ外時勢ノ推移ニ應シ現實ニ即シタル効果の見地ヨリ對滿支文化事業殊ニ對支文化事業從來ノ取扱方ニ多少ノ變更ヲ加フルモノトス¹²

日本政府は、従来、日本人が中国を視察するための費用の支出が多すぎた

と考えており、両国の視察者の往来の人数の偏りを是正しようとして、積極的に中国人が日本を訪れることを支持するため、補助金の金額を増額し、講演や視察の予算総額の「三分ノ二ヲ支那人（滿ヲ含ム）渡日費ニ充ツルコト」¹³とした。外務省文化事業部が予算執行をする上で基準の参考にしていたのが『對支文化事業講演視察費ニ關スル件』だった。

間もなく、外務大臣広田弘毅が、「文化一機密合第四〇二號」『滿支人ニ對スル講演視察費補給ニ關スル件』¹⁴を公布して、在滿支各公館に宛てて改定した對華文化事業方針を正式に送付した。まず、中国のどの地方から日本に視察（講演）に来るかに依って資金援助額の基準が定められている。その次に、講演、視察の資金援助をする対象者の優先順位が定められている。また、講演、視察の資金援助対象者の六割は日本留学経験者にするようにとも定めている。「注意事項」では、別に、外務省の承認を経てから申請者を出国させること、申請者本人が東京に到着次第直ちに外務省に赴き決裁を経て公布されること、従って講演視察費は必ず本人が東京に出向き受け取ること、が定められている。加えて、外務省は、来邦者の帰国後の感想や訪日と関係のある行動について随時報告するよう各公館に要請し、来邦者が新聞雑誌などの媒体に文章を発表した場合は、その原文に訳文を添付して外務省に報告するように求めている。

外務大臣広田の名前で公布された「文化一機密合第四〇二號」は、日本の在滿支各公館長（別記五十七館）宛てに送られた¹⁵。そして、中村はまさにこの機密文書の内容に従って、「機密第一五八號」にあるように外務省に郁達夫を日本に招聘することを提案したのである。

一方、日本政府も郁達夫が左翼思想を持った作家だということは明らかに承知していて、彼が1936年6月1日の『論語』第89期で「戦争と平和」〔訳注：原題は「戦争與和平」〕という文章を発表したことも、その文章の力点は、主に「和」を唱えることに反対することにあり、〔訳補注：南宋は和を主としたが和を重んじた歴史的結果を中国人は知っているから〕「中国も戦いのひとつも試してみたら」いいではないか、と述べつつも、同時に中国人の謙り譲るという弱点について批判もしている¹⁶ことも知っていた。このことについて、中村は当然承知していたはずだが、それにも関わらず彼を招聘すること

に執心したのは何故だろうか。日本政府は対華文化事業政策で、親日派だけでなく反日派も招聘すると、はっきり規定している。この政策の要点は、日本政府が資金援助の対象とする訪日者のリストの優先順序を見れば明らかである。日本政府が資金援助を提供できる人物には、順番に、「滿支ノ學界ニ重キヲナス學者、日本ニ於テ高等教育ヲ受ケ歸國後數年間來邦セルコトナキ者、排日的色彩ヲ帶ヒル者ニシテ若シ本邦ヲ視察了解シ反日態度ヲ改メ得ヘキモノト認メラルル者」¹⁷が含まれている。明らかに郁達夫はこの条件に当てはまっており、換言すれば、日本政府は郁達夫が左翼思想から転向することに対して大きな幻想と期待を持っていたと言える。

以上をまとめると、郁達夫を日本に招聘したのは日本政府が制定した対華文化事業政策の一環だったということが確定できる。

第二には、郁達夫は当時、名声高く時代をときめく人であったことが理由として上げられる。1930年7月には、早くも、日本駐上海領事館領事だった重光葵が外務省に宛てて報告した文書の中に、郁達夫と彼が主編した『大衆文芸』のことが言及されていた¹⁸。

また、在杭州領事代理松村雄茂は、1935年10月に広田に宛てた「機密第二七八號」『人物調査ニ關スル件』で、次のように報告している。「本件ニ關シ昭和十年（1935年—筆者注）九月二十日附報三機密合第一六九四號貴信ヲ以テ御申越ノ趣敬承依テ御指定ニ基ク當館管内住居ノ支那重要人物調査表別紙ノ通り茲ニ提出致スニ付御査閲相成度」。その名簿では、浙江省の各界の要人、全部で十六人の略歴が列挙されており、郁達夫もその中に含まれていた。

郁達夫 著述家 四十一才 浙江省富陽縣人

日本帝國大學文科出身 元北平大學教授 高等學學時代ハ醫學ヲ志セシモ後文科ニ轉セリ 小説家トシテ令名アリ 一時左傾的思想ヲ有スル者トシテ當局ニ睨マレシモ目下鳴リヲ靜メ時々支那雜誌ニ變名ニテ當ラスサワラスノ雜文又ハ小説ヲ寄ス¹⁹

以上のことから、郁達夫の名前は日本外務省につとに要注意人物として注

視されていたことがわかる。中村は「機密第一五八號」で、郁達夫崇拜者が中国の青年層に相当数いることをとりわけ強調しており、しかも、外務省が正式に郁達夫の訪日を批准した文書では、主に文学という側面から中国の青年層が日本に対する認識を深めるのに郁達夫が大きな役割を担える人物だということ、加えて、中国には郁達夫の崇拜者が多くいることが強調されている。

そうだとすると、日本はどのようにして郁達夫を通じて中国の青年層に日本に対する認識を深めさせるつもりだったのだろうか。当然、郁達夫の名を借りて日本を宣伝しようとしたはずだ。中村は、「機密第一五八號」で、郁達夫に訪日旅行記や日本通信を書かせ、それを日本人が福建省で経営している『閩報』に投稿させるよう、外務省に求めている。中村は同時に有田宛に、郁達夫の新作『達夫遊記』を参考として送っている。もし郁達夫のような有名人が日本見聞記や日本紀行を書いて日本を宣伝してくれたら、そして、それを日本人の経営する『閩報』に投稿してくれたら、そのもたらす宣伝効果がいかに大きいかは明らかだ。

このように見てくると、日本が主体的に郁達夫を招聘したのは、時代にときめく彼の名声に目をつけ、彼が青年層に持っている大きな影響力を利用して日本を宣伝しようとし、いわば「日中親善大使」の手本となるような人物に仕立て上げようとしていたと考えて間違いないだろう。

第三には、郁達夫は日本留学経験があり親日派でもあった陳儀と親しかったことが挙げられる。陳儀は福建省政府の主席に就任した後、日本留学の経験のある人物を重視していた。陳儀と郁達夫は二人とも日本留学経験者であり、また同郷でもあった。このことは、日本にとってみれば、親日派を育てるのに郁達夫ほど最適な人物はいないということになる。それに、当時、郁達夫は福建省政府の参議であつたし、近く公報室主任を委任されることになっていたから、政府の要人とも言え、必ずや日本が懇意にすべき重要人物になることは間違いなかった。他にも、日本は福建省という有利な地理的位置も極めて重要視していた。例えば、中村が有田に宛てた「機密第二二三號」には、「福建省ハ我國ニトリテハ特殊地域ヲ形成スト称セラレ來リタルニ關ス我國ノ文化的施設ハ極メテ乏シク歐米人ノ經營スル病院學校其ノ他ノ文化的

施設ハ斷然我方ヲ凌駕スル有様ニテ遺憾ニ堪ヘサルトコロナリ」²⁰と書かれている。福建省という特殊な地理的位置であればこそ、日本は福建における自国の勢力が弱まるのを怖れたのであり、必然的に福建省政府の対日関係を重視せざるを得なかったのだ。福建省政府の要人と良好な関係を築き、日本留学経験のある人士を籠絡することは、紛れもなく一種の投資であり、遠謀深慮を秘めた戦略だったのだ。

以上をまとめると、日本政府は上述した三つの理由があったからこそ、左翼思想を持っていた郁達夫を日本に招聘しようと画策したのだ。これらの理由は全て日本政府側の政治的目的に依るもので、郁達夫を招聘したのは、表面上は日中親善という名目を取り繕い、その実は彼を政治的に利用し籠絡し親日の旗振り役に仕立て上げようとする政治的陰謀が背後に隠されていたと言っても過言ではなからう。

4 郁達夫の訪日の目的と同行者

中国側の立場からすれば、郁達夫を訪日させる目的は、二つあったと一般的には考えられている。一つは、郭沫若に帰国するよう促す使命を負わせること²¹、もう一つは、印刷機を購入することである。二番目の目的については、日本の『北海時報』の輪転機を購入することだったとはっきり指摘している人がある²²。しかし、この説は果たして正しいのだろうか。目下、外務省の文書からは印刷機購入に関する記載は未だ発見されていない。

実は、注目に値する状況証拠がある。1935年12月の時点で既に中村が外務省文化事業部文化第一課課長の林安に書信を送り、建設計画中の福建省立病院にレントゲン機械を寄贈することを提案していたが²³、林安に断られ²⁴、中村は更に文化第二課課長の宮崎申郎に書信を送っていた²⁵。中村がこの提案を堅持し続けたことは最終的には無駄にはならなかった。なぜなら、内田五郎が福州総領事館総領事に異動になった後、内田は「公第三九六號」で、郁達夫と同行する「黄丙丁ハ文化事業部ヨリ福建省立醫院ニ寄贈セラルヘキ

『レントゲン』機械受領ノ使命ヲモ有スルモノナル」²⁶と述べているからだ。このことから、郁達夫と黄丙丁が日本に行く前に、日本側が中国に医療器械を寄贈することは基本的に確定しており、それが正式に批准された文書は郁達夫と黄丙丁が既に日本に到着した12月8日に下達されたのだ、ということが言える。文書の規定では、1936年度より対華文化事業の特別会計事業費から日本円で八千円を支出し、この限度額内でレントゲン機械を購入して福建省立病院に贈呈すること、となっている²⁷。

従って、二人は訪日前には間違いなく医療器械の件について了解していたはずである。それから、寄贈される医療器械は二人が帰国するときに直接持って帰ることになっていたわけではなく、外務省が運輸会社に委託して輸送を代行してもらうことになっていた。福建省政府参議兼公報室主任として郁達夫は、なんら問題なく省政府を代表してこの一件について協議する権限を持っていた。ゆえに、筆者は、所謂「印刷機」と考えられてきたものは、実はレントゲン機械だった可能性が非常に高いと推定する。

他にも、外務省に保存されている資料によれば、レントゲン機械を寄贈するために、外務省とメーカーとの間で交渉され交わされた契約、船運会社と交わされた運輸契約や器械及び運輸保険に関わる保険契約等々、関係する文書は240頁もの多きに及ぶ²⁸。しかし、全面的な侵略戦争が間もなく勃発したために、外務省は1937年5月にメーカーと取り交わしたレントゲン機械購入の契約協議を反古にした²⁹。このため、外務省が福建省立病院に医療器械を寄贈しようとしていた一件は終に実現しなかった。

ところで、当然のことながら、郁達夫が訪日したのは彼なりの目的があった。彼は講演の時に聴衆に呼びかけた。「自分ハ十數年日本ヲ訪レサル処今般日本ノ最近の進歩状態視察及旧友ニ會スル爲來タノテアル本來ハ魯迅ト共ニ來ルヘキ筈テアツタカ魯物故ノ爲自分丈ケ來京シタノテアル」³⁰〔訳注：「(民國)廿五年十二月二日於日華學會郁達夫講中国文壇」原稿の欄外注に「問題トナレル郁ノ講演原稿写し」とあり。訳文は「概譯別紙添付」とある手書きの「郁達夫講演概譯」より転写した〕。かつて九年間も留学生生活を送った国に、十四年という歳月を経て、再びその国を訪れることができたらと願うのは、人として当たり前の情ではなからうか。それに、郁達夫は日本に広い人

脈もあり、日本の政治家とも、文化人とも、軍人とも交流があった。かつて過ぎた懐かしい国を訪れ、旧友に再会できる、その思いがおそらくは彼が喜んで日本の招聘を受けた理由の一つだったのではないだろうか。

郁達夫は王映霞に宛てた手紙〔訳注：十二月十八日付。1937年1月『宇宙風』第三十三期に掲載〕で、京都を訪問したときの気持ちを「二十年近くも久しい間訪れることがなかったこの地に今回再び会えたことは、どんなに嬉しい心持ちがしたことだろう。」³¹と打ち明けている。

しかし、旧情のためだけではなく、郁達夫が訪日したのは、他にも目的があったはずだ。それは、この訪日の機会を充分に利用して、日本の各界で日中両国人民の間の友好を主張し、できれば更に反戦を旨とする左翼思想を唱え、日本軍国主義の侵略という陰謀を暴露することだった。これに対して日本の警察が郁達夫の講演を禁止する措置をとった一件から、郁達夫が心の中に抱いていた極めて正義感あふれる政治的な目的を見て取ることができる。

ここで、筆者はもう一点、考証したいことがある。それは、郁達夫が訪日した時に、果たして同行した人がいたかどうかという問題である。この問題について、これまでのところ提示した研究者はいない。筆者は上述したところで何度か言及したように、最新資料に依って考証したところ、郁達夫と同行したのは、日本留学経験者の医学博士、黄丙丁であったと結論した。郁達夫と黄丙丁の二人は福建にいた時から親交が深く、二人はよく日本語で会話をしていたというエピソードもある³²。黄丙丁は福建人で、1928年に奉天南満医科大学を卒業した後、大学に残って助手を勤め講師に昇進し、その後、日本の東北大学大学院で更に深く研究し、初めは医学部助手に任ぜられ、成績がずば抜けて優秀だったことから、後に破格の取り計らいで国費留学生に選拔され、毎月、外務省文化事業部から当時の日本円にして一百円の学費援助を受けた³³。そして、1933年に医学博士号を取得し、1934年に帰国した³⁴。

黄丙丁が日本を訪れた目的は郁達夫とは違っていた。彼が訪日した時の身分は、福建省立病院建設準備処主任であり、病院が完成した後は初代院長に就任することになっていた。今回の訪日は日本の医療施設などを視察し、病院建設のために参考にすることが目的だった。訪日中に黄丙丁が訪れたのは、東北、関東、中部、北陸、関西、九州の各地方に及んでおり、外務省が彼の

視察のために作成した紹介状の数だけを見ても、彼が視察した病院、研究所、医療器械店から製薬工場等まで入れると、二十箇所が多きに上っている³⁵。

他に次のような証拠もある。「機密第二二三號」によると、黄丙丁と陳儀は関係が非常に密で、「尚黄博士ハ陳儀ノ信任厚キノミナラス職業柄省政府首脳部トモ密接ナル關係アルヲ以テ本官ニ於テモ將來同氏ヲ通シ各般ノ情報ヲ蒐集致度希望ヲ有シ居ル[後略]」。³⁶ このことから、日本政府が黄丙丁を招聘して福建省立病院が医療設備を準備するのを援助したのには、ただ病院の設備を援助するだけではない公言できないある意図が隠されていたこと、その意図とは将来的に情報収集源として利用することだったことがわかる。

ここからは、もう一度、郁達夫と黄丙丁二人の同行の状況を見てみよう。後述する警視庁総監が見た訪日行程にあるように、郁達夫と黄丙丁は一緒に上海を出発し、長崎に到着した次の日には汽車に乗って東京に着いている。そして二人とも東京の万平ホテルに宿泊した。三日目は、中華留日学生監督処と駐日民国大使館武官室を表敬訪問し、明治神宮を参拝し、市内外を観光した。四日目は、外務省を訪問し、各地訪問視察の便宜を図ってもらうよう依頼した。五日目には、万平ホテルから茗溪会館に移った。ここまでは、二人の訪日時の最初の行程は基本的に同じだったことがわかる。

しかし、黄丙丁が郁達夫と一緒に台湾に行き、一緒に帰国したかどうかについては、未だ確実な記載が見つからない。外務省が郁達夫の台湾訪問のために作成した紹介状にも黄丙丁の名前はない³⁷。しかしながら、警視庁の監視報告に依れば、黄丙丁は台湾を経由して厦門に帰ろうとしていたことがわかる³⁸。その他にも、黄丙丁が帰国後に出した手紙から、黄丙丁は日本を視察した後、途中で台湾を経由して、年末に中国に戻ったということがわかった³⁹。これは、郁達夫が12月30日に帰国した行程と、時間的に合致する。だとすれば、二人の訪日の目的が異なっていたため、途中の一部分の行程は別々だったことを除けば、来日帰国の前後の行程は同じだったはずだ。よって、黄丙丁が郁達夫の訪日の同行者だったと結論しても間違いはなからう。

5 訪日経費の財源

郁達夫の訪日に関わる経費の問題については、南京政府が郁達夫のために二百元の旅行準備金を支給したという説もあり⁴⁰、またその金額は数百元だったという説もあり⁴¹、更には、日本側から謝礼として当時の日本円にして二千元を受け取ったという説もある⁴²。孫百剛氏は二百元説に疑問を提示したことがあり、また、二千元の謝礼金についても証拠不足だと指摘した⁴³。外にも、二千元の謝礼金を受け取ったという報道に対しては、日本人の一戸努氏が訪日中の郁達夫に真偽のほどを訊ねたところ、郁達夫は二千元の謝礼金の給与について否定したという⁴⁴。1936年の訪日が南京政府の資金援助を受けたものかどうかについては、当面論じない。しかし、筆者の考証した限りでは、郁達夫の1936年の訪日は間違いなく日本外務省の資金援助を受けており、その金額は日本円にして二千元ではなく一千元であった。

「機密第一五八號」を見ると、中村は郁達夫を日本に招聘することを提案すると同時に、外務省に高額の資金援助をするよう求めている。「三月二十八日文化一機密合第四〇二號滿支人ニ對スル講演視察費補給ノ件ニ準シ文化事業部ヨリ視察費金一千圓ノ高補給方御詮議相仰度」⁴⁵。外務省は一千元の視察補助費を支給することに即時同意し、郁達夫が東京に着いたら郁達夫本人に交付すると指示している⁴⁶。同時に、既に郁達夫のために一千元の予算を算出していた。

次に、日本政府が郁達夫に「高額の資金援助」を提供したと筆者が主張する根拠について論じたい。その理由は二つある。第一に、中村が依拠した「文化一機密合第四〇二號」に附されている『改正要綱』には、「南支方面、福州以南ノ各地ヨリ來ル本邦視察者ニ對シ一人ニ付視察手當金四百圓乃至五百圓ノ範圍内ニ於テ之ヲ補給ス」と規定されている。例えば、郁達夫に同行した黄丙丁への補助額は五百円である。四川方面からの来邦者への補助額が最も多いが、それでも六百円を超えない。しかし、この支給基準には例外がある。

「右ノ外例外トシテ前顯官、要路ノ職ニ在リタルモノ並著名ナル人物ニ對シテハ前各項ニ依ルコトナク身分ニ應シ自由裁量ヲ以テ手當補給額ヲ其ノ都度

決定スルモノトス」⁴⁷。郁達夫は明らかにこの自由裁量に依って補助金額を決定できる来邦者に属すとみなされたのだ。更に、日本人が中国を視察するときの最高補助金でも文書に規定されている額面が僅か五百円に過ぎないことを鑑みると、郁達夫に提供された一千円という資金援助は、かなりの高額だったと言わざるを得ない。

第二に、資金援助の金額が当時の日本人の平均収入より遙かに高いことにある。統計によると、郁達夫が日本を訪れた 1936 年の、日本人の一日の給料を平均すると、僅か一円三十五銭だった⁴⁸。この統計により一ヶ月を三十日として計算すると、一ヶ月の平均給料は四十円五銭にしかならないから、一千円という金額は少なくとも当時の日本人の二年分の平均給料に相当することになる。二ヶ月の訪日行程の計画に対して、日本人の二年分の給料に相当する資金援助を得たことになるのだ。

以上をまとめると、日本外務省が郁達夫の訪日のために提供した資金援助がいかに高額だったかは想像に難くないだろう。おそらくこの高額の資金援助があったから、郁達夫は東京を訪れた時に郭沫若とその家族に気前よく振る舞って、郭沫若を感激させたのだろう⁴⁹。

郁達夫のために提供された一千円の資金援助の正式な文書は、10 月 28 日に起草され、五日後の 11 月 2 日には正式に批准された。文書には外務次官、文化事業部部長、文化第一課課長、第二課課長の直筆の署名があるだけでなく、更に会計課長、収入支出担当者、検査担当者、出納担当者等の十五人にも及ぶ署名がある。文書では同時に、補助金は受領者本人が外務省に来て受け取るようにと定めてある⁵⁰。郁達夫と黄丙丁は外務省に行った時に補助金を受け取ったはずだということがはっきりしている。なぜなら、外務省のその年の「講演視察費」の財務リストを見ると、二人の費用とも既に支給済みのリストに記載されているからだ⁵¹。

そうだとしたら、この経費は一体どこから捻出されたのだろうか。先に述べたように、郁達夫を日本に招聘したのは日本の対華文化事業の一環だった。しかも、日本側が郁達夫と黄丙丁の二人を招聘する拠り所となったのは、「機密第四〇二號」が定めるところだった。この「機密第四〇二號」は対華文化事業の中でも重要な文書で、「団匪賠償金」等の中国からの賠償金をどのよう

に用いるかを規定し、日中両国間の視察者の人数を増やし、特に中国人が日本に視察に来ることを支持するものだった。しかも、郁達夫と黄丙丁に対する補助費支給を正式に批准した文書にはどちらも「對華文化事業費 講演視察費」の文字が入っている⁵²。従って、郁達夫と黄丙丁の訪日費用は実質的には「団匪賠償金」等の中国からの賠償金から捻出されていたことになる。

6 警視総監報告に見える郁達夫の訪日行程

郁達夫は知名度が高かったため、その影響力も宣伝効果も当然軽視するわけにはいかなかった。日本政府にとってみれば、郁達夫を利用する絶好の機会でもあったが、その行動を監視する必要もあった。

郁達夫と黄丙丁は、11月12日に日本の「上海丸」で長崎に上陸し、二日目にはすぐに鉄道で東京に向かった。このことについては、長崎県知事の田中広太郎から二日目に上層部宛てに報告書が上がっている。[訳注：原文は手書き]

今回外務省文化事業部ノ招聘ニヨリ二ヶ月ノ予定ニテ学校圖書館其の他文学方面ノ視察シ亦支那ノ文化哲学文学ニ関する講演ノ爲渡來シタリト称シ在福洲[ママ]日本官憲ヨリ文化事業部其の他関係部ニ宛テタル紹介状ヲ所持シ居リテ格別容疑ノ点ナク即日鉄■東京市ニ向ケ出發シタリ⁵³
[訳注：■は判読不能箇所。]

このことは、田中が日本政府の指示によって二人を監視していたことを示している。文書では内務大臣潮恵之輔、外務大臣有田八郎をはじめ、警視総監、神奈川、大阪、兵庫、山口、福岡各庁府県長官に報告をしている。また、田中の報告には、郁達夫に同行していた黄丙丁の名前が見えないことから、監視の重要な対象人物は郁達夫であったことが明らかに見て取れる。

二人は東京に着いた後、すぐさま日本警視庁の監視下に入った。警視庁総

監石田馨は上層部に監視報告を四回している。四回とも、報告は全て内務大臣潮恵之輔、外務大臣有田八郎、陸軍大臣寺内寿一等三高官の他、主だった役職としては、駐上海内務書記官、東京刑事地方裁判所検察官、台湾総督府警務局長をはじめ、北海道、愛知、京都、神奈川、大阪、兵庫、山口、福岡等の道府県知事にも上がっていた。明らかに、監視報告は日本政府内部と関係各都道府県の間で相互に情報を共有していた証拠である。郁達夫の動静に関して随時連絡しあい、彼の行動を容易に把握できるようにしていた。石田の監視報告に依ると、郁達夫と黄丙丁の二人の訪日行程はおおよそ以下のようになる。

11月13日午後3時25分、二人は東京駅に着き、そのまま万平ホテルに宿泊。

11月15日、中華留日学生監督処と駐日民国大使館武官室とを訪問、明治神宮を参拝、市内外を観光。

11月16日、郁達夫は改造社社長山本実彦を訪問し会見。

11月17日、二人は外務省を訪問、各所訪問視察の調整を依頼。その後、郁達夫は東洋文庫、静嘉堂文庫、宮内省図書館を視察。一方、黄丙丁は慶應大学附属病院を視察。

11月18日、二人は万平ホテルから茗溪会館に移る。この時、二人の立てていた計画は以下の通り。黄丙丁は11月20日晚に上野駅から列車に乗り仙台に行き、十日前後逗留し、母校である東北大学医学部等を訪問し、東京に戻って帝国大学病院、赤十字病院、和泉橋病院、順天堂病院、北里研究所等を視察する計画だった。折しも建設中だった福建省立病院のために参考になる資料を集めると同時に、医療器械等を購入する準備もしていた。郁達夫は12月2日に文学者の佐藤春夫と一緒に東京にいる中国人留学生を集めて（時間と場所は未定）、佐藤春夫は日本の文壇の現状について、郁達夫は中国の文壇の現状について、それぞれ講演を行う予定だった。ただし、この時点では日程は未定だった。その他に、前朝鮮総督の宇垣一成、陸軍大将の松井石根、陸軍中将の坂西利八郎などに会見することを希望していた。

11月26日午後、東亜同文会が霞山会館で開いた晩餐会に出席し、『中国の現状について』という題目で講演を行った。出席者は、本多熊太郎、太田宇之助、五百木良三、大竹貫一、高橋雄豺、八角三郎、古島一雄、有賀長文、赤池濃、木村鋭市、菊池武夫等、総勢七十五人がいた。

12月2日午後4時から5時30分まで、日華学会ビルで中華留日学生学術講演会を行った。聴衆は中国人留学生約五百人だった。佐藤春夫は『日本文壇の流派と其の批評』、郁達夫は『現代中国文壇の概況』と題してそれぞれ講演を行った。郁達夫の講演は反日的な言論を扇動する内容に触れたため、厳しい監視の下に行われた。

12月5日午後2時、中国文学研究会が日華学会ビル三階の講堂で開催する講演会に出席し、竹内好等十三人の出席者に向けて『中国詩の変遷』という講演を行うはずだったが、12月2日の講演で反日的な言論を扇動する内容に触れたことに鑑みて、郁達夫は研究会の主な責任者であった高橋君平の善意による忠告を受けて、この講演をキャンセルした。

12月13日午後2時、予め予定されていた中華留日明治大学校友会が開催する第二回学術講演会に予定通り出席し、『文学の時代性』という講演を行った。

12月15日午後6時、大亜細亞協会幹事の中谷武世が開催した座談会に出席した。

12月16日午後6時、日本ペンクラブに招待され晩餐会に出席した。

12月17日午前9時、東京駅から汽車に乗って京都に向かった。途中で京都、奈良を参観した後、台湾に向かい、台湾総督府の坂本外事科長を訪問した。坂本外事科長の手配により、台湾で中国の現状などについて講演を行い、予定通り明年1月10日ごろ帰国した。⁵⁴

上述したのは、四回にわたる監視報告を参考にして整理した日程である。これによって、現在不明の郁達夫訪日行程資料の空白部分を補うことができる。機密資料をから得た全体的な印象としては、個人的に訪問した事案につ

いては、報告を上層部には上げていないようだ。石田が第一次報告書で郁達夫と左翼作家郭沫若等は深い交流があると報告し、確かに二人の行動については厳密に注意を払っていたにも関わらず、郁達夫の年譜⁵⁵と対照してみると、日本側の監視は決して二十四時間密着して監視し続けるという体制ではなく即かず離れずという程度であったことがわかる。例えば、郁達夫が郭沫若と会ったことについて見てみると、郁達夫は郭沫若宅を三回訪れているし、郭沫若と共に『太公報』特派員の于立忱等を訪問したりもしているが、その行動については、いずれも上層部に報告を上げていない。このことから推して判断すると、日本側の警備は専ら公開された場所での講演や集会に的を絞って監視していたと言えそうだ。その他にも監視報告からわかることは、郁達夫と密接に接触した日本人も監視対象と見なされていたようであり、例えば、郁達夫の講演会に出席した日本人の名前や、佐藤春夫の講演会の講演概要に及ぶまで、監視報告の中に含まれている。

郁達夫に対する監視を通して、日本政府の矛盾した心理を読み取ることができる。郁達夫が日本を訪れることを自ら望み、彼を招いて講演をするよう計画しておきながら、一方では、疑心暗鬼に陥り、郁達夫が反日的な言論をし、反戦的左翼思想を標榜し吹聴するのではないかと心配していた。そして、日本政府が心配していたことは皮肉にも実際に起きた。なぜなら、郁達夫が公開講演をした時に、力の限りを込めて、両国人民の友好と侵略への反対を訴えたからだった。

7 郁達夫の日本に於ける講演問題

郁達夫の講演も発端は外務省の方から先に提案され、外務省が予めお膳立てをしたものだった。「機密第二六四號」を見れば、郁達夫は招聘を受けた時点で既に、中村が提案した日本での講演依頼に同意していたことがわかる⁵⁶。「機密二六四號」を中村が起草したのが6月21日、それから間もなく7月8日に中村が宮崎宛に出した手紙の中で再び以下のように言及している。「尚渡

日後ハ講演方本官ヨリ依頼致候處快諾ヲ得居リ候二付同氏出頭ノ際ハ御引見ノ上可然便宜供與相煩度此段紹介旁御依頼得貴意候」⁵⁷。当時既に広東総領事館に赴任していた中村が、郁達夫の訪日が近づいてきた頃、講演会場等諸事にわたって前もって手配しておくよう、宮崎に改めて依頼したのである⁵⁸。

ここからわかることは、講演は日本側の団体結社等が依頼したと従来言われてきたことが、実は、外務省文化事業部が予め背後で了解を取り付け、調整を行い、手配をした、ということだ。また、以上の資料は日本政府が郁達夫の講演をいかに重視していたかという証拠でもある。

そこまでののに関わらず、郁達夫の日本での講演は禁止されてしまった。この点に関してはいろいろ議論のあるところだが、結局、一体どの講演が「問題」になったのだろうか。日本の研究者は、『現代中国文壇概況』だと考えており⁵⁹、このことは、石田の監視報告と『日華学会二十年史』で言及されている郁達夫の講演題目と基本的に一致する⁶⁰。このことからすると、当時、宣伝した時にはこの題目だった可能性が高い。しかし、筆者が監視報告に附されている郁達夫の講演原稿の全文を仔細に調べたところ、題目は『現代中国文壇の概況』ではなく、実際には『中国文壇の現状』であったことが判明し、この題目について、郁達夫自身が講演中にも『中国文壇の現状』と話していることも確認できた。この講演原稿の内容については今まで誰も言及した研究者がいない。筆者が初めて発見したものである⁶¹。さて、それでは、講演の中の一体何が「問題」だったのだろう。石田が上層部に報告したところによれば、郁達夫の講演の概要から事の顛末が知れる。[訳注：原文は手書き]

中国今日ノ文學ハ抗日排日ノ文學デアル中國々民ハ賣國奴デナイ限り日本ニ反抗スルノハ當然デアル既ニ滿洲ヲ奪ハレ北支ヲ失ハントシテ居ル中國ノ無産階級知識階級ハ國民黨ノ圧迫ヲ受ケテ居ル外帝國主義の圧迫ヲ受ケ一般文學家ハ此圧迫ニヨツテ出路ヲ塞ガレ日本ノ文學家ヨリ困難ナ境遇ニ在ル我等ハ努力ニ依テ將來ヲ打開シナケレバナラヌ⁶²

しかし、筆者は、実際は、石田が上層部に報告した概要と郁達夫の講演原

稿には食い違いがあることを発見した。講演原稿では、郁達夫は決して日中両国民の対立を激化させようとしているわけではなく、反対に、両国民の友好を主張しているのだ。「先日一日本友人ヨリ『現在中国ノ文学ハ完全ニ排日抗日文学ナルヤ』ト問ハレタルニ對シ『文人ニシテ此ノ種狹隘ナル思想ヲ有スレハ則チ文人ト爲ス能ハス中国文學ハ必スシモ抗日ナラス若シ米國我等ヲ侵略セハ米國ヲ排斥シ英國我等ヲ侵略セハ英國ヲ排斥ス則チ我國ヲ侵略スル國家ハ何レモ之ヲ排斥ス』ト」⁶³。言外の意味は、両国民の間での言論が激化していることに対して不満を表しているとともに、抵抗の理由はあくまでも侵略という前提があつて論じたものであつて、侵略さえなければ抵抗ということに言及するまでもない、ということをおうとしているのだ。それに、この観点は、一週間前に郁達夫が日本語で行った『中国の現状』という講演で、「支那民衆全體が排日論者、或は共產主義者であると云う風に考えて居るのは、日本人一部分の偏見で、抑々間違つて居ります。」⁶⁴と述べた観点と同じであり、抗日戦争が勃発した後に発表した『日本語ラジオ放送の宣伝の要点』（原題は『日語播音の宣伝要点』）という一文で、「所謂排日、侮日、抗日等々というのは、みなどれも軍閥の逆宣伝であり、我々が軍閥に対して取っている態度をあなた方民衆の身の上に轉換しようとしているのである。」⁶⁵と述べている観点とも基本的に一致している。結局、郁達夫は一貫して日中兩國人民の友好と軍国主義とははっきりと區別することを主張し、その両者を混同して論ずることに対して異を唱え、加えて、兩國人民の対立を激化させることに反対していた。

当然、主な「問題」は依然として残る。それは、郁達夫が今回の講演で抵抗すべき侵略の事実を明言し「ひとつの國家として外部からの侵略を受けたとき、必ずその國民の一致團結が促されるのは、当たり前現象だ」と述べただけでなく、彼は売国奴の売国行為を痛烈に批判し、創作活動をするときにもその様を描写するように呼びかけ、「たくさんの人が売国奴になり、たくさんの人が國を売り、それにたくさんの人が売国奴以下のコトをしている。これらは全て描写しなければならない。」⁶⁶と述べたこと。この力のこもった呐喊は、日本各界及び留學生の間に間違いなく強烈な反響の渦を巻き起こし、共鳴の嵐を引き起こした。当然、このことは日本の軍国主義者にとってみれ

ば間違いなく痛棒を打たれたも同然であり、日本の軍国主義者の肋骨に深く突き刺さったに違いない。

そのために、今回の講演は、日本警視庁によって反日的な言論を扇動するものだと見なされ、その後に中国文学研究会の例会で準備されていた講演、『中国詩の変遷』が禁止の憂き目に遭うことになった。この後、郁達夫は座談会やペンクラブなどの行事に出席したが、講演の計画があったとしても、講演を行ったかどうかについては何も言及していない。このことから、郁達夫は講演禁止に遭ってから、おそらく公開講演は二度と行わなかった可能性が高いし、講演は二回しか行えなかったのだと言い換えることもできよう。

「問題」とされた講演からわかることは、郁達夫は日本側の多大な金銭的援助を受けて招聘されながらも、国家の存亡の危機にあって、祖国のために正義を貫き主張し続け、侵略に対して反対の姿勢を堅持し、売国奴の売国行為を痛烈に糾弾した。最後にまとめると、これらの言論は郁達夫の愛国文人としての「赤子之心」を表現したものだと言ってよいだろう。

8 結び

本稿は、筆者が日本で新たに発見した、郁達夫の1936年訪日時に関する価値ある各種資料を通して、郁達夫訪日の背後にある様々な事情や訪日に関わる問題について、一步踏み込んで考証した。この考証は、これまでの郁達夫訪日研究に欠けていた部分を補完するのものと確信している。

郁達夫訪日の発端から帰国までの過程全体を俯瞰して見ると、日本が郁達夫を招聘したのは、明らかに日本側の政治的な利益を考えてのことだった。しかしながら、この訪日は日本の外務省の有力な支持を得て郁達夫に破格に高額な資金援助を提供しただけでなく、郁達夫が各所を視察する際の紹介状を書いたりもして、彼のためにいろいろ便宜を図ったのも事実である。もしも、日本政府の支持がなければ、郁達夫は訪日にあたって様々な活動を実行するのは難しかったはずだ。しかし、日本政府が郁達夫訪日に対して抱いて

いた幻想と期待、すなわち彼の左翼思想を転向させることができるのではないか、という企図は、思惑通りに叶ったわけではなかった。日本側は郁達夫が帰国後、日本人の経営する『閩報』に投稿してくれることを希望していたが、今日に至るまで、郁達夫が帰国後に『閩報』に書いた文章は発見されていない。高額な訪日の費用は日本側に出してもらったとはいえ、郁達夫が祖国のために振りかざした正義の愛国心は、些かも変わることはなかったのだ。それどころか、講演の機会を借りて日本軍国主義に反対する論調を高らかに唱え、両国民の友好を主張し、反戦思想を宣伝したのだった。

また、郁達夫は今回の訪日を通して、日本の軍国主義の醜悪さに対して訪日前よりも更に深刻な認識を持つに至った。「日本は薬でも治せない侵略症という病に罹ってからは、まるで何かに取り憑かれたかのように、戦争の準備に急ぐあまり、日常の一切が軍事化している。」⁶⁷ 戦争が間もなく始まると予感した郁達夫は帰国後すぐに文章を書いて自国民に警告を発した。「民族の中興、国家の再建が実現できるかどうかは、我々この一年以内の努力如何にかかっている！親愛なる同胞諸君、今はのんびり歌を唱い踊りを舞い酒など飲んでいる場合ではないぞ！」⁶⁸ 可見、今回の訪日は郁達夫の反戦左翼思想を微動たりとも動揺させなかったばかりでなく、むしろ、彼の愛国の情熱の炎を更に燃え上がらせた。戦争が勃発してからは、積極的に抗日宣伝活動に参加し、言論は更に鋭さを増した。当時の日本人は誰もが皆、郁達夫を「抗日派文化闘士」だと認めないわけにはいかなかった⁶⁹。

以上をまとめると、郁達夫の1936年の訪日での言論と行動は、中華民族の利益に合致したものだと言える。彼の正義の反戦の声は侵略世論に全土を覆われた日本にあっては結局のところ微弱であったかもしれないが、しかし、当時の広大な中国人民の反戦の声を代弁するに足るものであったし、彼の言行は強い愛国主義思想を持つ偉大な作家としての地位を損なうものでは決してなかった。

原注〔訳注：中国語資料名は日本漢字に直し、日本語資料は原典の字体に依った。〕

- 1 伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫編：『郁達夫資料補篇』（上）、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、1973年、55-56、99-112頁；『郁達夫資料総目録附年譜』（下）、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、1990年、261-262頁。
- 2 王映霞：《半生雜憶》、郭文友《千秋飲恨—郁達夫年譜長編》四川人民出版社、1996年、1408頁より引用。他に、郁云著：《郁達夫伝》（福建人民出版社、1984年、137頁）、郁飛：《郁達夫の星洲三年》（蔣增福編：《衆説郁達夫》、浙江文芸出版社、1996年、356頁）等にも同じような観点が示されている。
- 3 「機密第一五八號・中國人ニ對スル視察費補給ニ關スル件」1936年4月20日〔訳注：昭和十一年四月二十日〕、JACAR（アジア歴史資料センター）『支那学者 郁達夫』（B05015770000）、第8-9コマ。
- 4 「電送第6896號・支那学者郁達夫ニ對シ本邦視察手当補給ニ關スル件」1936年〔訳注：昭和11年〕5月8日、『支那学者 郁達夫』、第7コマ。
- 5 「昭和十一年度講演及視察費（昭和十一年五月末調）」、JACAR『昭和十一年度 分割1』（B05015099600）、第23コマ。
- 6 「機密第二六四號・中國人ニ對スル視察費補給ニ關スル件」1936年6月24日〔訳注：昭和十一年六月二十四日〕、『支那学者 郁達夫』、第5コマ。
- 7 前掲《半生雜憶》、《千秋飲恨—郁達夫年譜長編》、1408頁。
- 8 前掲《我與達夫共事》、《千秋飲恨—郁達夫年譜長編》、1407頁。
- 9 前掲《千秋飲恨—郁達夫年譜長編》、1397頁。
- 10 「對支文化事業ニ關スル閣議案」1923年、JACAR『文化事業部關係 大正十二年から昭和四年（1）大正十二年文化事業』（B05015000400）、第2コマ。
- 11 「對支文化事業實施綱領追加」1923年、JACAR『文化事業部關係 大正十二年から昭和四年（1）大正十二年文化事業』（B05015000400）、第6コマ。
- 12 「對支文化事業講演視察費ニ關スル件」1936年〔訳注：昭和十一年〕3月5日、JACAR『滿支人ニ對スル講演視察費補給ニ關スル件 昭和十一年三月』（B05015655900）、第14コマ。
- 13 同上注、第15コマ。
- 14 「文化—機密合第四〇二號・滿支人ニ對スル講演視察費補給ニ關スル件」1936年3月28日、『滿支人ニ對スル講演視察費補給ニ關スル件 昭和十一年三月』、第2-25コマ。
- 15 同上注、第2コマ。
- 16 吳秀明主編：《郁達夫全集》第8卷、浙江大学出版社、2007年、237-239頁所収。
- 17 前掲「文化—機密合第四〇二號」、『滿支人ニ對スル講演視察費補給ニ關スル件 昭和十一年三月』、第24コマ。
- 18 「中國革命互濟會ノ外國語雜誌刊行計劃ニ關スル件」1930年7月11日、JACAR『共產黨宣傳關係雜件ノ對日宣傳關係 第三卷』（B02030938800）、第15コマ。
- 19 「機密第二七八號・人物調査ニ關スル件」1935年10月22日、JACAR『支那人要人消息雜纂 第一卷』（B02031668100）、第6コマ。
- 20 「機密第二二三號・醫學博士黃丙丁ニ對シ日本病院視察費補給方稟請ノ件」1936年5月27日、JACAR『醫學博士 黃丙丁』（B05015769900）、第7コマ。
- 21 前掲《郁達夫の星洲三年》、蔣增福編《衆説郁達夫》、356頁。
- 22 于聰著：《郁達夫風雨説》、浙江文芸出版社、1991年、172頁。
- 23 「外務省文化事業部林課長殿」1935年12月16日、JACAR『福建省立病院ニ對シ「レントゲン」機械寄贈ニ關スル件 昭和十一年七月 昭和十二年』（B05016045200）、第2コマ。
- 24 「在福州中村総領事殿」1936年3月4日、同上注、第12コマ。

- 25 「文化第二課課長宮崎申郎殿」1936年7月8日、『医学博士 黄丙丁』、第19コマ。
- 26 「公第三九六號・中國人ニ對スル視察費補給ニ關スル件」1936年10月20日、『支那學者 郁達夫』、第35コマ。
- 27 「福建省立病院ニ對シ「レントゲン」機械寄贈方ノ件」1936年12月8日、『福建省立病院ニ對シ「レントゲン」機械寄贈ニ關スル件 昭和十一年七月 昭和十二年』、第15コマ。
- 28 前掲『福建省立病院ニ對シ「レントゲン」機械寄贈ニ關スル件 昭和十一年七月 昭和十二年』、第1-122コマ。
- 29 『「レントゲン」發生裝置及附屬品買賣契約解除方ノ件 昭和十三年七月』(B05016045300)、1938年7月21日、第1-24コマ。
- 30 「外秘第三〇〇二號・中華留日學生講演會ニ於ケル郁達夫ノ反日講演ニ關スル件」1936年12月4日、『支那學者 郁達夫』、第17コマ。
- 31 郁達夫：《從鹿囿伝来的消息》、《郁達夫全集》第6卷、260頁。
- 32 蔡聖焜：《憶郁達夫先生在福建》、《千秋飲恨—郁達夫年譜長編》、1463頁。
- 33 「黄丙丁ヲ特選留學生ニ選定ノ件高裁案」1932年2月27日、JACAR『昭和七年度特選留學生選定』(B05015515200)、第2コマ。
- 34 「外秘第二九〇〇號・文化視察ト稱スル中國左翼作家並ニ醫學視察ト稱スル中國人醫師ノ動靜ニ關スル件」、1936年11月26日、『支那學者 郁達夫』、第33コマ。
- 35 「醫學博士黄丙丁ニ對シ便宜ノ件」。この類の紹介状はそれぞれ1936年11月16日、18日、12月1日、2日に四回作成されている。『醫學博士 黄丙丁』、第8-13コマを参照。
- 36 前掲「機密第二二三號」、『醫學博士 黄丙丁』、第7コマ。
- 37 「郁達夫ニ對シ便宜供與ノ件」1936年11月30日、『支那學者 郁達夫』、第23-24コマ。
- 38 「外秘第三一五八號・文化視察ト稱スル中國左翼作家並ニ醫學視察ト稱スル中國人醫師ノ動靜並ニ退京ニ關スル件」、1936年12月22日、『支那學者 郁達夫』、第38コマ。
- 39 「片山數夫様・富川辰夫様」1937年1月2日、『福建省立病院ニ對シ「レントゲン」機械寄贈ニ關スル件 昭和十一年七月 昭和十二年』、第77コマ。
- 40 前掲《郁達夫の星洲三年》、蔣增福編《衆說郁達夫》、356頁。
- 41 前掲《半生雄憶》、《千秋飲恨—郁達夫年譜長編》、1408頁。
- 42 《大公報》1936年10月、孫百剛《郁達夫外伝》、浙江人民出版社、1982年、73頁より引用。
- 43 前掲孫百剛《郁達夫外伝》、73頁。
- 44 一戸務：「來朝中の郁達夫(上)」、『時事新報』、1936年12月8日、『支那學者 郁達夫』、第26コマ。
- 45 前掲「機密第一五八號」、『支那學者 郁達夫』、第9コマ。
- 46 「電送第6896號・支那學者郁達夫ニ對シ本邦視察手當補給ニ關スル件」1936年5月8日、『支那學者 郁達夫』、第7コマ。
- 47 「對支文化事業講演視察費ニ關スル件」1936年3月5日、JACAR『滿支人ニ對スル講演視察費補給ニ關スル件 昭和十一年三月』(B05015655900)、第18コマ。
- 48 久米益雄編：『賃金長期系列50年—日本賃金50年の歩み』、産業労働出版協会、1988年、647頁。
- 49 郭沫若：《達夫來訪》、《郭沫若全集》文学編第13卷、人民文学出版社、1992年、409-410頁。
- 50 「支那學者郁達夫ニ對シ本邦視察手當補給ニ關スル高裁案」1936年10月28日、『支那學者 郁達夫』、第2コマ。

- 51 「昭和十一年度講演及視察費調（昭和十二年一月三十一日現在）」、「昭和十一年度講演及視察費調（昭和十二年四月三十日調）」、JACAR『昭和十一年度 分割2』（B05015099700）、第15、21、45、51コマを参照。ここでは以下の説明をしておきたい。第21コマと第51コマで、郁達夫と黄丙丁二人の費用はどちらも「支出豫定」欄内に入れられているが、これは誤りで、実際には「支出済」である。理由は三つあり、第一に、この時、郁達夫と黄丙丁は二人とも既に帰国していたこと。第二に、第15コマ及び第45コマの財務リストと一項目づつ対照すると、二人の費用は丁度「支出済額」欄内にあること。第三に、どの項目も「支出済」と「支出豫定」欄が並列されていて、その後に「差引残」があるが、ここでは二項目とも「支出豫定」となっていて、その後に「差引残額」となっている。以上の三点から、郁達夫と黄丙丁の二人は日本が提供した補助金を領収したと断定できる。
- 52 「支那學者郁達夫ニ對シ本邦視察手當補給ニ關スル高裁案」1936年10月28日、『支那學者 郁達夫』、第2コマ、及び「醫學博士黄丙丁ニ對シ本邦視察手當補給ニ關スル高裁案」1936年11月4日、『醫學博士 黄丙丁』、第2コマを併せて参照。
- 53 「十一外親第二四四一五號・文化事業部招聘中國人渡來ノ件」1936年11月13日、『支那學者 郁達夫』、第12コマ。
- 54 以上に述べた日程は監視報告「外秘第二九〇〇號」、「外秘第三〇六二號」、「外秘第三〇〇二號」、「外秘第三一五八號」を参考にした。『支那學者 郁達夫』、第30-40コマ。
- 55 前掲『郁達夫資料総目録附年譜』（下）、261-262頁。
- 56 前掲「機密第二六四號」、『支那學者 郁達夫』、第5コマ。
- 57 「文化第二課課長宮崎申郎殿」1936年7月8日、『医学博士 黄丙丁』、第18拍。
- 58 「文化事業部宮崎申郎殿」1936年10月14日、『支那學者 郁達夫』、第11コマ。
- 59 前掲『郁達夫資料総目録附年譜』（下）、261頁。
- 60 日華学会編：『日華学会二十年史』、日華学会、1939年、163頁。
- 61 郁達夫のこの講演原稿についての詳細な考察は、拙稿『釈読新発見の郁達夫訪日時「問題」演講稿』、『多元文化』第10号（近刊）を参照。
- 62 前掲「外秘第三〇〇二號」、『支那學者 郁達夫』、第16コマ。
- 63 同上注、18コマ。
- 64 もとは1936年12月20日の日本の『霞山会館講演』第39期に掲載されたもので、原題は「支那の現状に就て」、《郁達夫全集》第8巻所収、孫百剛訳、256頁。
- 65 《郁達夫全集》第8巻、309頁。
- 66 前掲「外秘第三〇〇二號」、『支那學者 郁達夫』、第17-18コマ。
- 67 郁達夫が《星光日報》の記者、趙壁に語った訪日の感想。陳松溪：《郁達夫与福建抗日救亡運動》、《福建党史月刊》、1988年第6期より引用。
- 68 郁達夫：《可愛慮的1937年》、《星光日報》、1937年1月1日、《郁達夫全集》第8巻、261頁より引用。
- 69 高木特派員：「陷落前夜・狂乱の漢口（二）」、『読売新聞』（夕刊）、1938年8月12日。

後記

本稿は、査読者である富山大学准教授齊藤大紀氏と名古屋大学准教授田村加代子氏より貴重なご意見を賜りました。ここに心より感謝申し上げます。

訳者付記

本稿は、寇振鋒氏が、あるアメリカ在住の梁啓超の研究者の著書の後書で、梁啓超の日本滞在中に日本の警察によって記された日記を閲覧した、という記述に出会ったことから、国立公文書館のアジア歴史資料センターで公開されている機密文書を検索し、郁達夫の1936年訪日に関する関係機密資料を発掘したことに多くを負っている。

この資料を発掘したことが、1936年の郁達夫訪日に関して、空白だった部分を補完することを可能にし、争点になっていたいくつかの問題についても事実を明らかにし結論を出すことができた所以である。

この度、本論集の編集委員である田村加代子が、著者の言を借りれば郁達夫に関する「重大な新発見」を世に出すことになるというこの論文の持つ重要性に鑑み、今後の郁達夫研究のみならず中国近現代文学研究にとって利用価値のある重要な資料の、ひいては、近代日本文学研究にも資するところがあるやも知れぬ資料の存在と利用価値を広く知らしめるべきとの意を強くし、敢えて日本語訳を同時掲載することにした。